

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生高学年の部 優秀賞

母への思い

朝日小学校六年

西村 にしむら

幸 みゆき

「どうしてわたしのお母さんは、他の子のお母さんと違うの。」
そう思ったことが何度もありました。私の母は、生まれつき耳が聞こえません。

私は小さいころから、母には思っていることをあんまり言えませんでした。母と話すには手話をつかって伝えなければなりません。私は母からももらった手話の絵本を見て、手話というものを覚えました。

最初はただ手話の絵を見てまねをしていました。だんだん大きくなるにつれ、その絵を見て、手話として覚えられるようになりました。絵を見てもわからない手話は、母にどうやるのかを教えてもらいました。

私の母は友達とご飯を食べる時、手話で話をします。でも早すぎて何をしゃべっているのかわからない時があります。そんな時、母は何を言っていたのか教えてくれます。

今はあまり行くことができなくなった手話サークルにたまに連れていってくれることがあります。そこには、母と同じ耳が聞こえない人がいたり、手話を勉強したい人が来たりします。私が初めて行った時、ホワイトボードや、母がよく使っているメモ用紙に絵をかくて遊んでいました。でも手話がかかるようになってくると、大人の人に混ざって、ゲームをしました。今では、聞こえない人と会っても会話することができようになりました。

私の家族と母の友達とご飯を食べる機会がありました。そこでは母とその友達が話をしている盛り上がりがありました。その友達が父に話をしたら、あまり手話をしない父が手話をつかったのでびっくりしました。母は「家でも手話をつかってね。」と言ったのが面白かったです。

私は母が大好きです。母は手芸が得意なので、よく私にボーチやカバンを作ってくれます。私もたまに、土曜日が何も無い時だったら、母と一緒によく作ります。そんな母が自慢です。

でも母とはたくさんけんかをしています。手話がわからない時、口話で言ってしまうと、母が

「分からないからもう一度言つて。」

と言うのもう一度言つと、

「分からないから紙に書いて。」

と言われて、あきらめて言わなかったら、

「なんで言わないの。」

と怒られて同じ喧嘩を何度もしてしまいます。でも、けんかになっても母は私に優しくしてくれます。

私は言葉がほかの子より少し遅れていました。母が聞こえないので、テレビに出てくる言葉がわからない時、いつも父にどういう意味か聞いていました。でもやっぱり言葉や勉強がどうしても遅れてしまいます。

そんな私を見ていた母は、慣用句などの言葉に關係する本や勉強のテキストを買ってきてくれました。そして母も私と一緒に言葉の勉強をしています。

小さいころは、自分が思っていることが言えなかったけど、今は学校であったことを母に言えるのが楽しいです。そして母は、大人になったら役にたつ料理や洗い物の仕方を教えてくれます。

私は耳が聞こえない人が、聞こえないことをどう感じているのだろうと思つたことがあります。その人にしかわからない辛い思いや苦しさを理解できるそんな人間になりたいと強く思います。

母が今日まで、どんな思いをして生きてきたのか。これからも母によりそい、たくさんのかを教えてもらい、少しでも母の役に立てるようになりたいです。

私には夢があります。それは、手話通訳の資格をとることです。私は母のように聞こえない人のためになりたいと思います。

私は母に

「産んでくれてありがとう。」

と言いたいのです。これからも母とは仲良く、あまりけんかをしなくて、思っていることははっきりとかくさずに言いたいと思います。手話も上手になつていきたいです。